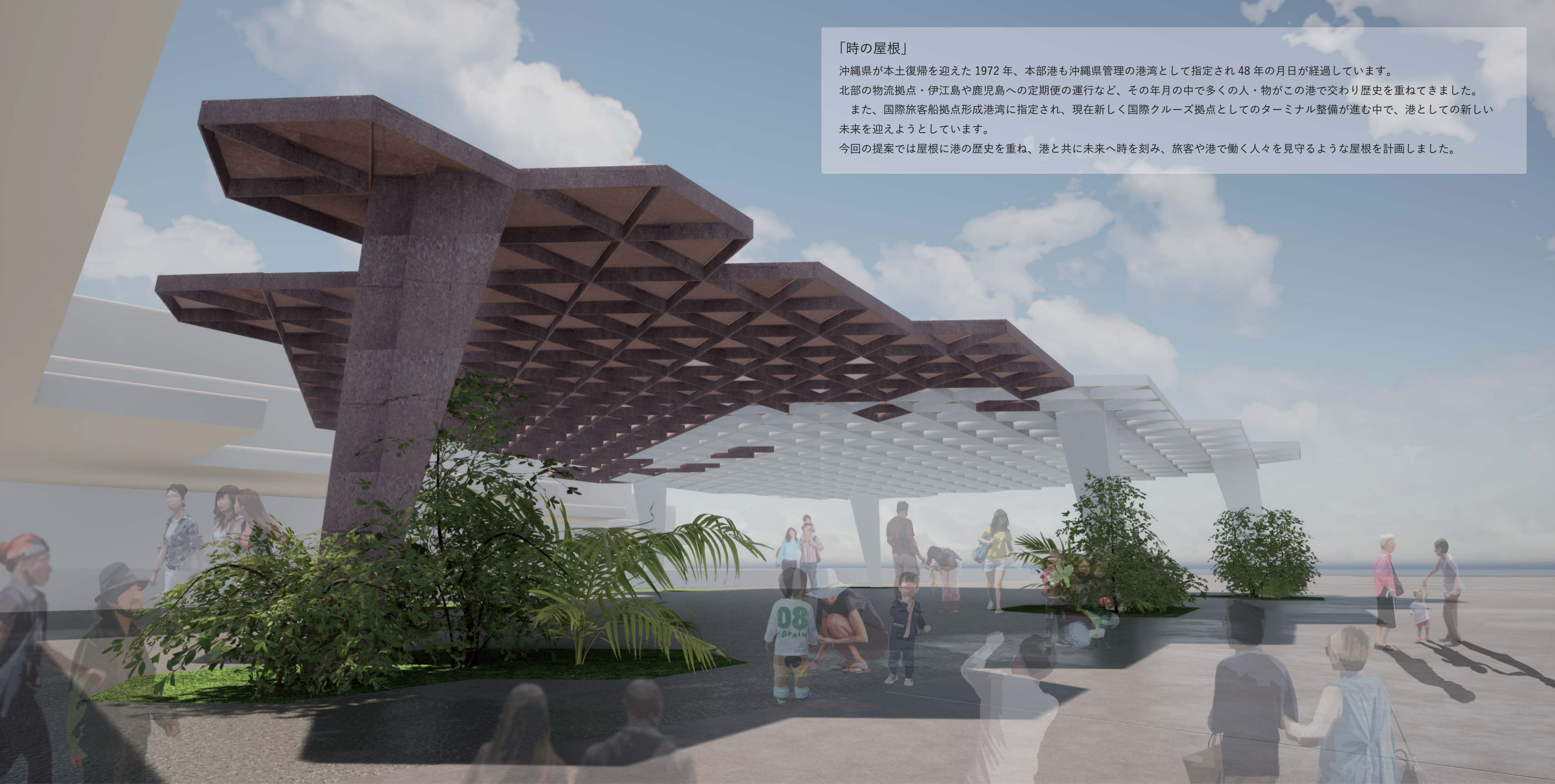
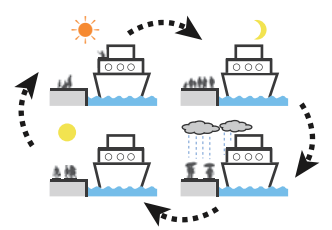


「時の屋根」

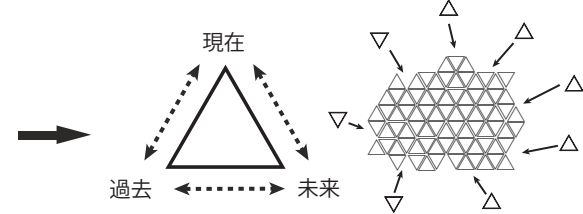
沖縄県が本土復帰を迎えた1972年、本部港も沖縄県管理の港湾として指定され48年の月日が経過しています。北部の物流拠点・伊江島や鹿児島への定期便の運行など、その年月の中で多くの人・物がこの港で交わり歴史を重ねてきました。また、国際旅客船拠点形成港湾に指定され、現在新しく国際クルーズ拠点としてのターミナル整備が進む中で、港としての新しい未来を迎えようとしています。今回の提案では屋根に港の歴史を重ね、港と共に未来へ時を刻み、旅客や港で働く人々を見守るような屋根を計画しました。



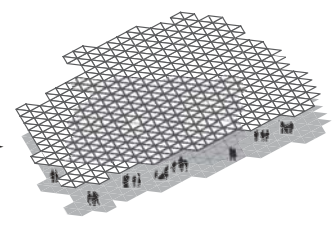
・デザインコンセプト



開港から今日に至るまで多くの人・物が行き交い港の歴史を重ねて来た

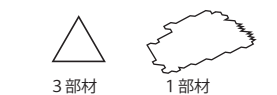


開港から現在に至るまでの時の時間の経過、そして未来に向けての時の流れを三角形として捉え、それらが集合して屋根を形成する

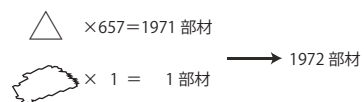


集合して出来た屋根が港に流れた時間とこれから流れていく時間を紡いでいく

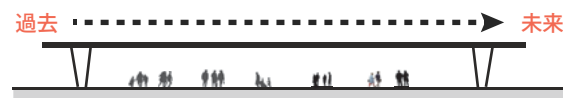
・屋根について



屋根を構成する三角形1つを3部材屋根板を1部材として考える

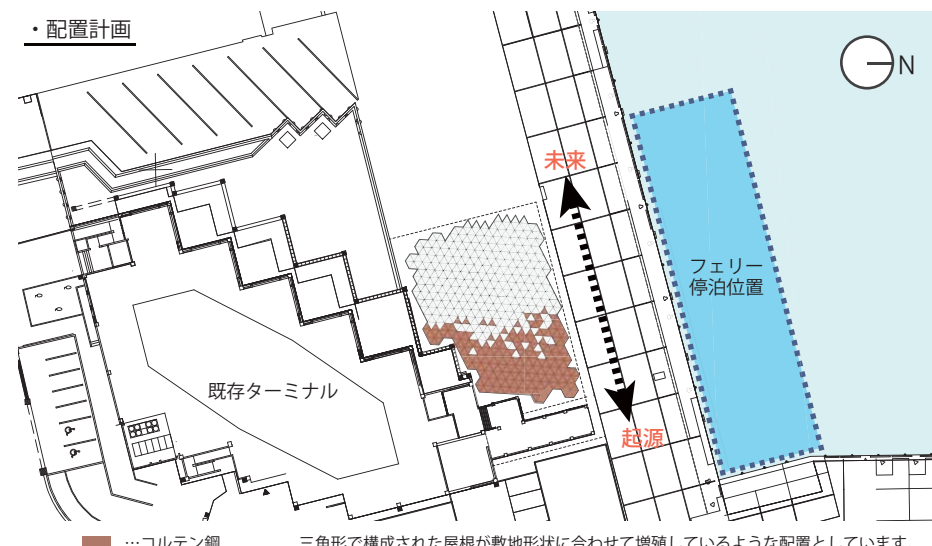


657個の三角形と1枚の板部材で屋根を構成する



本部港が地方港湾として指定された1972年に合わせた1972部材で屋根を構成1972年を起源とした過去から未来へ港の歴史を紡ぐ屋根となる

・配置計画

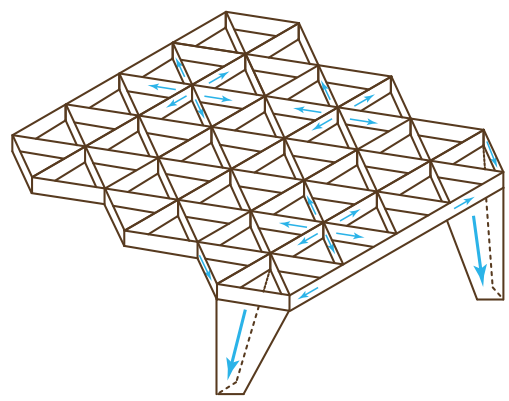


三角形で構成された屋根が敷地形状に合わせて増殖しているような配置としています。東(日の出)を起源、西(日の入)方向に未来として捉えて鋼材を配置しています。



・仕上の考え方について

港(海沿い)という環境は鋼材にとっては過酷な環境であり、長い年月の中で鋼材は錆びて朽ちていきます。しかし、錆びた鋼材も歴史を重ねてきた港の風景を構成する要素と考え今回提案する屋根も鉄骨造としました。鋼材の錆への懸念はありますが「錆=部材の劣化」ではなく、「錆=歴史の重なり」として捉えました。鋼材に予め錆の膜を作り耐候性を高めたコルテン鋼を使用し『過去』のイメージ。耐候性塗料で仕上げた鋼材を『未来』のイメージとしています。2種類の鋼材で屋根を構成することで、新しい鋼材が時を経て錆びていく様子を屋根に投影し、過去から未来へと港に流れる時間を表現しています。



構造フレームイメージ



柱イメージ

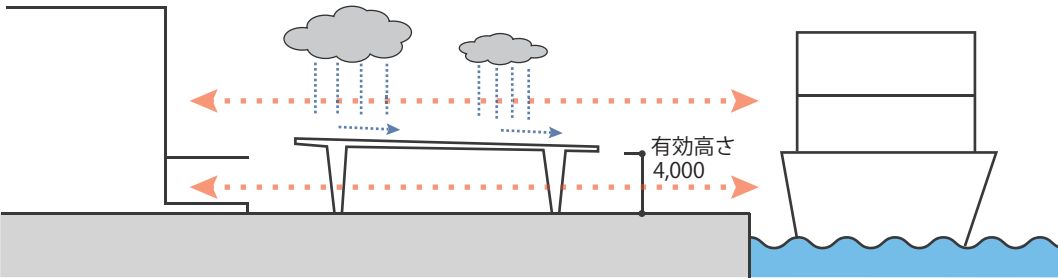
・構造について 『三角格子屋根構造』

三角格子で構成された屋根が荷重・水平力を分散し、柱・基礎へ伝達させます。屋根は可能な限り軽量化し、構造的な負担を軽減することで中央部を無柱空間として利用しやすい空間とします。

屋根部材は工場で作作り、現場で組み立て後に柱部材に乗せるという流れの施工を考えています。

・柱について

柱は地中から三角格子へ伸びるようなイメージとしています。柱の足元は鋼材をコンクリートで保護した上で植栽スペースを配置しています。植栽スペースは鋼材が長い年月の中で風化し、いずれは自然に還るといった時間の流れを表現しています。また、フォークリフトの柱への衝突抑止及び、将来的な錆汁の流出防止にも機能します。



・雨水処理及び景観への配慮について

雨水については屋根を緩やかに海側に傾けて片勾配で処理します。また、屋根下高さは水側で4mを確保しフォークリフトの出入りに支障の無いようにします。

屋根をフラットにする事で既存ターミナル～船舶間の視線も可能な限り遮らないようにします。

・使用する鋼材について

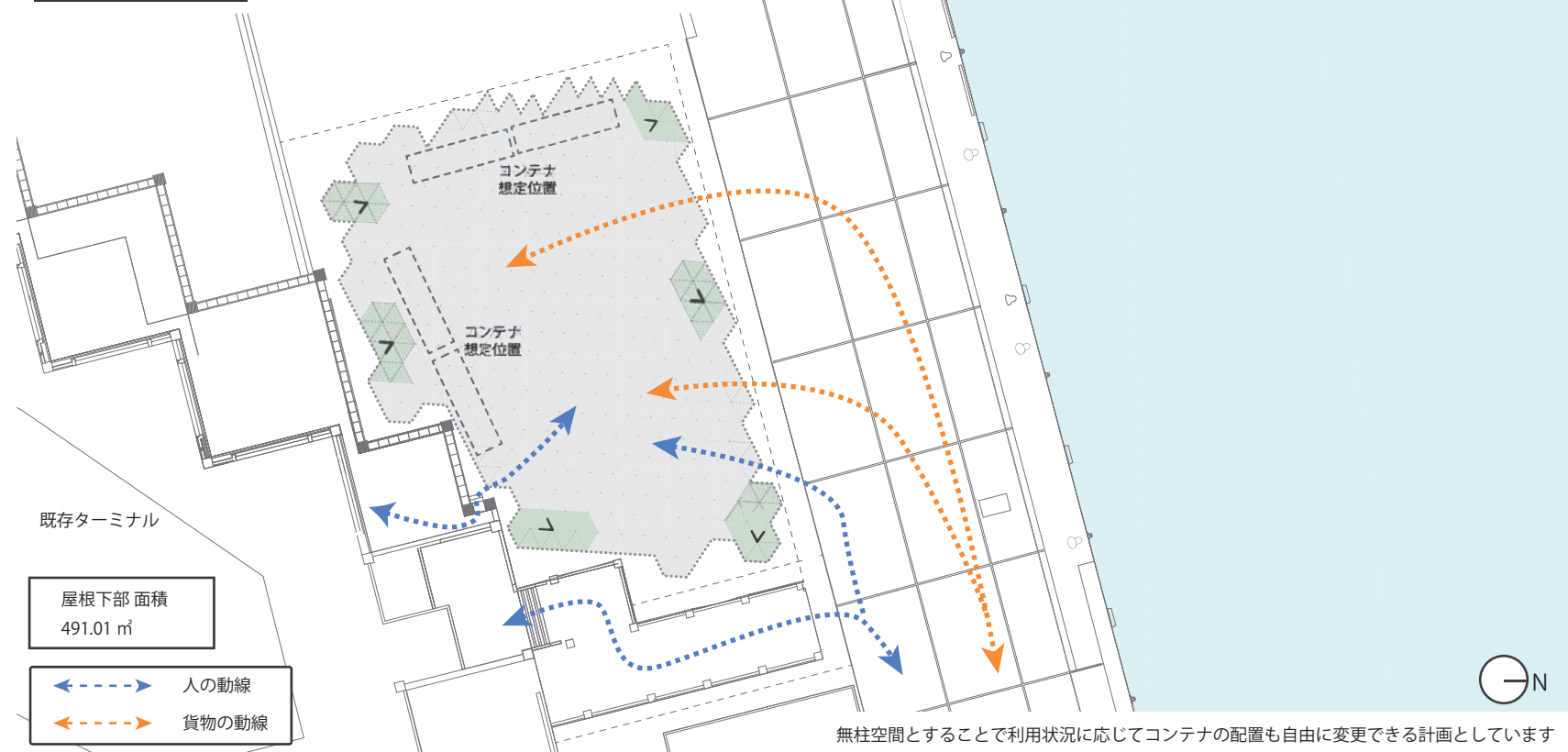
今回の提案では、港に流れる時間を2種類の鋼材を使用して表現しています。過去をイメージした部材に使用するコルテン鋼は表面に予めサビの膜を作る事で、新しく発生する錆を防ぎます。今回の計画地が海沿いで有る為、塩害に対してより強い耐候性を持たせた高塩分対応型の鋼材の使用を想定しています。

未来をイメージした部材には耐候性塗料を使用してコルテン鋼と対比させます。少量の錆が発生してもコルテン鋼と馴染み、港に流れた時間を表現出来るのではないかと考えています。

コルテン鋼 施工事例(東京都内)
竣工後5年程度経過 無塗装仕上



・平面図 S=1/200



無柱空間とすることで利用状況に応じてコンテナの配置も自由に変更できる計画としています

